

風 吹 山 の 植 物 採 集

大 木 正 夫

本会の第78回例会は、昭和55年8月30・31日、北安曇郡小谷村、風吹山で、植物採集会として行なわれた。参加者は奥原弘人、大塚孝一、小口好久、尾台喜貞、上条重利、草間勉、小林富雄、斉藤定美、春原弘、田中茂、豊国秀夫、豊国やなぎ、馬場多久男、平林陸男、古谷義人、古谷芳枝、渡辺隆一の諸氏と幹事大木の総勢18名で、地方の採集会としては盛会であった。

第1日（8月30日）。あいにく雨天であったが、翌日参加の申し出のあった者および馬場氏を除いて全員夕方までに、電車またはマイ・カー利用で、小谷村来島の国民宿舎風吹荘に集合した。夕食事には、自己紹介を行ない、多少のアルコールも手伝ったのか、楽しい歓談が続いた。夕食後部屋を移して、植物学四方山話に花を咲かせている内に、馬場氏も来荘、話の中に入る。

第2日（8月31日）。昨夜来の雨は仲々止まず、

出発時間を少しおくらせたが、結局、雨の中を会員の数台の車に便乗させて貰い、車道のある限り車で入り、後は雨傘、レインコート、ビニール・シートなど各自持参の雨具をつけて採集を始める。夏も終りに近かったので、アキノキリンソウ、コウゾリナ、カワラハハコなどキク科植物の個体数多く、キツリフネは花が咲き切った感があった。ムシカリの未だ黒くなる前の濃紅色の果実が、ひときわ目立って美しく、皆、代わる代わるシャッターを切った。強雨のため途中で引き返し、風吹荘に戻って昼食。宿で用意して貰った弁当の他に、ビールやそばを特注する人もいて、多種多様な食事を終えて散会。帰途有志の者が小グループを作り、白馬村親海湿原と、大町市居谷里湿原を見学した。親海では木道沿いに、アケボノソウが満開であった。居谷里は、北限のハナノキを見るのが目的で、雨の中をぬれ乍らハナノキを数本探し当てて感激した。

横 内 斎 さ ん を 想 う

清 沢 晴 親

横内さんの逝去

横内さんは、教職に34年、京都大学木曽生物研究所勤務18年、計52年という長い公務員生活の間信州植物の研究者として県内各地の山野を跋渉され、退職後も御病氣をおして、御子息や御夫人の内助で溪谷に又高山にと歩を進め、植物を手にし眺め、かつ愛し続けられた。一方、家にありては、読書や原稿執筆等々、規則正しい日々を送られ、特に晩年は信州植物の由来や、随筆などの著作を成されるなど、その業績は驚くべきものでした。ところが1980年9月13日、老衰のため85才という御高齢ではありましたが、この畏友を失ない、一人哀悼の情を深くしております。

御葬儀は菩提寺である広田寺に於て厳かに執行され、今は生地東筑摩郡四賀村会田の地で、

瑞宝院草木愛斎禅清居士

として安らかに永眠なされておられます。

墓碑には次のように彫られています。

「独学で植物分類地理学及び陸水学の研究、山野巡

歴七十余年、新植物、八十六種発見、信毎文化賞、知事表彰、勲五等瑞宝賞授、兩陛下、皇太子同妃殿下の植物の御案内」

横内さんと植物、その他

横内さんの最後の著「山野巡歴」の補遺の中には「私をめぐる人々」として250余名の方々の名が挙げられている。あまり植物もやらぬ私も、光栄にもこの内に入っています。

「英雄は時代をつくるとか、逆に時代は英雄をつくるとか」いう言葉が有りますが、横内さんにはこんな一面があったでしょうか、あるいは、信州教育というものの何かを反映していたでしょうか。「山野巡歴」中の著者略歴を拝見しますと、教職生活34年（1911～1944）勤務学校数13校、この範囲は、南安曇郡・諏訪郡・上伊那郡・西筑摩郡（現木曽郡）・下高井郡・松本市・東筑摩の諸郡市にわたっていて、県内の植物の分類分布の研究には極めて好都合であったと想像できます。そして当時は、信州の教育会には、矢沢米三郎・河野齡蔵の両植物研究家が

在職中で、高山植物の研究は盛んで、信州の博物、(生物)教育や、自然研究に一時代を画したが、横内さんはその末期に、これらの先生から直接指導を受け、八ヶ岳などの調査に参加されて大きな成果を挙げることが出来たようである。

一方横内さんは、この頃から文部省の理科教科書に満足せず、地域に即した「小学理科筆帳」といったものを、信濃教育会から発行した。この頃から各地の教育会が先に立って、植物などを調査する傾向が盛んとなって来た。横内さんは木曽郡で、かかる研究グループに入り、矢沢・河野の後を継いだ小泉秀雄先生の指導下にはいった。そして、長年月をかけ木曽の村々を歩き、小泉先生と共著で、当時1町15箇村の木曽郡各村植物目録(ガリ版)を作製したばかりでなく、他に御岳あり、木曽駒ありで、横内さんのこれに注いだ御苦労は大変なものであったと想像される。

一方調査と平行して植物雑誌の発行を開始し、立派なガリ版誌1〜18号が(1926〜1930)発行された。この雑誌は、初期には矢沢・河野らの執筆が目立ったが、順次小泉に変わり、終末近くには横内さんの木曽谷植物目録の類が多く成って来た。矢沢・河野時代から小泉時代への更新が伺えるが、とにかく事務一切をきり廻していた横内さんはまことに精力家であった。

この頃、木曽福島に大火(1927年)があり、10年をかけて集めた腊葉標本、約15,000点を失ってしまったという御気の毒な事が出来て、さすがの横内さんも再起を決心する迄には大変であったようで、氏の著述の中にも所々に述べられている。

しかし、横内さんの情熱は衰えることなく、木曽郡の調査に加え、関東山脈・大雪山の調査も小泉先生と共に進められた。氏はいつも恩師小泉先生とよんでいたが、この恩師と歩調を合わせるのは小学校の教師として一学級を担任している片手間では及びもよぬことであった。横内さんから私にもらされた話であるが、調査シーズンには日曜日を挟んで、土曜・月曜が出張となる。したがって、調査と教育とのバランスを保つことが出来なかったらしい。しかし、目的に向かって進まれたのは、氏の強固な意志故であり、校長某氏等の愛情のおかげでもあった。一面はめぐまれ、一面では御苦労だったと感ぜられた。一校での在勤年数の短かったのも、あるいはこんな事にも原因があったかも知れないが、横内さんならではこのことで誰もが、まねの出来ることではない。

横内さんは木曽福島から南安有明に転勤された時(1929年)、私は豊科にいてはじめて友人となった。そして、教育会に呼びかけ自然調査をしようという話を持ちかけられ、テーマは水生動物の調査とし、京都大学大津臨湖実験所の上野益三先生に指導をお願いするという話まで一挙に決まった。当時の南安嶽教育会はこんな思想は夢にも持っていなかったのである。私は何とって呼びかけるかと言ったら、横内さんは、理科教育云々といった月並の理由ではなく、「知識階級は郷土の自然を明らかにする義務がある」という意見である。私はまだ教員生活5年目で、教育会は自然研究に金を出せという勇氣はなかった。私の他に尾日向君という先輩がいたが、結局幹部を説得して調査を行うことにしてしまった。この力量には私も驚いたが、参加し一年余りで、槍ヶ岳の源流から平地まで歩いてしまった。そして次年度からは一般動物、まず昆虫・鳥類を調査することになった。

ところが、横内さんに下高井郡の植物調査に来て呉れと呼び出しがなかった。結局南安の動物は私が引受け、氏は下高井に2年間の約束でおもむき、木曽同様に小泉先生の指導下で各村植物目録の作製に熱中した。横内さんはその後は戦時中に教職を去った。

信州教育には、教師として何か一つ人生観的なものを持った深みのある教育者を尊重する面があったので、横内さんもこのような環境下で趣味をいやが上にも伸ばせた幸福な人であったといえる。恩師小泉先生と共に信州植物研究の一時代を画し得たのも、多種多様の努力をした賜といえようか。

木曽生物研究所時代

1945年横内さんは上野益三先生の御厚意で入所された。この頃は敗戦の直後で食糧をはじめすべての物資が不足な時代であったが1963年迄18年間勤務された。単独赴任であったから土曜・日曜には自宅に帰られたが、後には極めて自由に研究が出来た。しかし、この頃すでに小泉先生は松本を去られ、どうも良い師を得られず独学のように感ぜられたが、営林局関係の森林調査の依頼を受けたり、月刊誌「林友」に各地の植物目録等の寄稿を続け、これは最近迄つづいた。また、上高地にもよく行かれ、中部山岳国立公園上高地解説員を行いつつ調査にはげまれたが、この頃は私も、木曽迄は上野先生の来られた時に行った程度であった。

横内さんと上野先生との関係は仲々深いものがある。横内さんが御手伝いした事がある湖沼学の泰斗

田中阿歌磨氏の御岳湖沼調査の資料を上野先生が引受けられ湖沼研究をされつつあったので、上野先生の信州湖沼の研究完成の為に御手伝いをし、松原湖群とか深見の池とか飯綱原の湖沼・志賀高原の湖沼等々全県下に及んだ。この時、横内さんは湖岸植物の記録を丁寧にされたようである。

そのほか木曽生物研究所建設の事に努力された。こんな関係から上野先生は横内さんの著書に序文を書かれたり「調査結果は必ずまとめて発表して置きなさい。放置して置けば、その人の死と共に烏有に成ってしまいますよ」とすすめられた。横内さんに大小多数の報告書があるのは、上野先生の御指導が反映した結果であるといえる。

後半、新たな学者との巡り合い

社会科指導の基礎資料として地方誌の刊行が急速に進み、過去の歴史的なものばかりでなく、人間生活の基礎である自然も重要視した「誌」となった関係で、植物方面は松塩筑地方をはじめとし、横内さんが中心となって調査することが多くなった。そして委員長あるいは顧問として立案や実施をされる一方、植物学者を招待して新しい知識の吸収につとめられた。その1,2例を挙げると、前川文夫先生に分類学者の御紹介を御願した所、はからずも先生御自身が来て下さって、手をとるように御指導下さった。ある夜、篠ノ井線坂北駅の宿に泊って頂いた時のこと、横内さんは私をさそって先生を訪問したところ先生は「フォッサマグナ地域の植物」について御説明下さった。夜更けの帰途、横内さんの感激は大きなもので、今になって考えれば、全く劇的な一夜であったと思われる。

というのは、横内さんは教育県と誇る長野県に植物誌の無いことを常々なげき、自分は植物をやった一生の仕事に独力でもよいからつくりたいと願っていた。そして何時でも野帳を使用し記録につとめた。矢沢・河野両氏も植物誌を志したが、記録が不十分で出来なかったから、自分は記録をするのだ、といって調査結果の野帳は何冊にもなり、それに加えて、小泉先生の千島や北海道及び信州各地の野帳を何十冊か頂いて来て、ひそかに方針を立てていた時であったからである。

その後水島正美先生が来松し指導に当られ、横内さんと水島先生は、鉢盛山や下水内郡・木曽御岳等々を一緒に歩かれ、新しい観察眼を養い得たので、横内さんの分類学的知識や分布論に著しい進展を見せることになった。

しかし残念にも1968年脳卒中で倒れられ、以来

病気の回復を待ちながら、日々少しずつ原稿をかき、念願の植物誌を「長野県の植物」と題して1971年急拠出版し、兎に角大望を果たした。けれども病気を苦にしたためか記録もれも多くその後2〜3回の増補をしているが、先に杉本順一氏の出した「長野県植物総目録」につき第2の県下の植物誌であったが、横内さんは充分目的を果されたといえよう。

横内さんの病後は12年間(1968〜1980)続いたがこの間に「長野県植物分布の由来」の著は、前述の前川先生の分布論を、大井次三郎氏の「日本植物誌」の分布と照合し自己の考えを入れて分布を説かれたものである。この筆法で伊那・佐久・那須の植物から最後は「信濃の植物分布区系」等々と精力的に筆を走らせたことは驚嘆の他、何ものもないといえようか。

更に横内さんの発見したという新種、新亜種、新変形など合わせて80余種といい、書き残されたかった種類もなお6〜7種と伺っているが、横内さんは次第に細分主義に傾いて来てはいないかと質問をしたり、余り老体を苦使せず、若い世代の人々に研究を残すように話をしたが耳が遠く成って会話も晩年ではできなかった。

横内さんは各地の同好者のために講習を開いたり、指導書を書くなど大変PRにつとめられた事は多大であり、又信州の山野に多くの学者を導き入れて自然界の解明に貢献されたことも大きなものがあつたと讃意を表するとともに、若き世代の方々は、横内さんの各種に与えた分布論を再吟味して益々信州植物研究の発展をはかってもらう事を希望していることを、私には何度も語り、俺は試案として出すのだが反応がないのが残念であると言って居られた。自然科学は疑問を持ってこそ進展があるであろう。横内さんは一矢を報いてもらいたいと申して居られことを重ねて記し、一人の友人として、植物愛好家、横内さんの心情をお伝えする次第である。

横内さんの御慶事

末筆になったが、横内さんは1962〜1979年頃の御病気の時を中にしての10数年間の御生活中には、知事賞・信毎文化賞・叙勲・皇居特別拝観等々の慶事の連続であった。御慶び申し上げる次第である。

横内さんの著書など発表物の一部

- 1924 続木曽谷春の植物(ガリ版)
- 1925 木曽駒ヶ岳植物目録
 - 〃 御岳火山植物目録
 - 〃 日本南アルプス寒地植物目録
 - 〃 上松町植物目録(小林・千村の共著)

- 1926 訂正木曾駒ヶ岳山脈植物目録
 “ 北越海岸植物目録（小林と共著）
 1928 木曾谷植物調査報告（同上）
 1929 木曾谷植物各村目録，他24部完成する
 1930 白山植物目録
 “ 関東山脈の植物
 “ 野麦峠及び御岳西麓の植物
 “ 針木峠・平小屋～立山温泉間の植物
 以上（総てガリ版印刷）
 1931～32（この間に調査報告数篇あり略す）
 1948 木曾谷の植物。附小泉先生木曾谷植物日記
 1949 御岳火山と乗鞍火山の植物（木曾教育会）
 1950 長野県の名勝と天然記念物（林友長野）
 “ 木曾谷産植物分布目録
 1952 信濃の植物
 “ 信州に於ける高山植物の分布
 “ 木曾山脈高山植物区系とその由来
 1953 信州野々海湿原を見る（水島と共著）
 1956 下水内郡植物誌（水島と共著）
 1957 下水内郡植物誌補遺（第一）
 “ 小泉秀雄調査・横内斎調査並編著
 日本中央アルプス植物誌（ガリ版）
 “ 東筑摩郡松本市誌「第一巻自然」及び中間報告数篇には，植物其他の執筆
 1958 下水内郡植物誌補遺（第二）（水島と共著）
 “ 御岳研究（自然篇）には木曾御岳の植物相其他の執筆
 1959 小泉秀雄原著・横内斎増改補
 日本南アルプス寒地植物誌（ガリ版）
 1960 瑞穂地区の初夏の植物（ガリ版）
 1962 下水内郡植物地理
 1963 瑞穂植物誌
 “ 賤母学術参考保護林の植物と生態
 “ ウェストン師の名刺と穂高登山同行者の日記（山岳56年度版）

- 1964 天皇后両陛下御散策地八幡大池周辺の植物
 “ 上高地の植物・乗鞍火山の植物（信濃路）
 1965 戸隠及飯綱高原池沼の植物（ガリ版）
 1966 信濃の湖沼
 “ 小菅山ヒメコマツ大樹林について
 1967 苗場山の植物（横内・飯沼協力）長野営林局
 1968 カヤの平北湿原の植物（同上）
 “ 美ヶ原の植物（美ヶ原観光連盟）
 “ 菅平植物誌（県衛生部業務課）
 1969 田立国有林の植物（飯沼・横内協力）
 1971 戸隠高原の植物（戸隠）（信毎新聞社）
 1972 本郷村の植物（本郷村文化財調査資料）
 1973 日本アルプスの高山植物（信濃植物同好会）
 1974 長野県の高山（寒地）植物（同上）
 “ 地史学上より見たる本郷村の植物（本郷村文化財調査資料）
 1975 浅間連峰の植物（池田登志男と共著）
 1976 天皇陛下御著那須の植物誌を地史的分布上からみる
 “ 釜無斜面の植物目録（ガリ版）
 “ 長野県植物分布の由来（信教出版）
 1977 伊那の植物とその地史的分布
 “ 佐久の植物とその地史的分布
 1978 諏訪地域植物相の研究（ガリ版）
 “ 四賀村誌 四賀村植物の全般を執筆
 1979 信濃の植物分布区系（信教出版）
 1980 山野巡歴と補遺（信濃路）
 なお、「信濃教育」および「長野林友」に発表された報文は，本誌12，13号所載の「長野県植物誌・資料Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ」を参照して下さい。

以上，横内さんの著書や報文等の若干を挙げたが，「長野県植物研究会誌」や「山と博物館」など多数の雑誌や新聞紙上に記されたものなどは枚挙に暇なしという言葉で一応結ぶ事にする。

〔新刊紹介〕池上義信（監修）・石沢進（編集）「新潟県植物分布図集 第1集」A4判，178頁図版12頁。植物同好じねんじょ会発行（1980年12月），3,500円。

新潟県の植物界のリーダーで本会々員でもある両氏が，じねんじょ会の協力によって県内産シダおよび種子植物全種の分布図の集大成に着手されたが，このほど第1集50種分が発刊された。作図はおなじみの金井方式により，頁大の地形図に1種ごとに黒丸印で示され（地図の大きさは9：10000000），続いて標本および文献データが克明に記録されている。

中には，末尾に生育地や分布状況に関するノートもある。こうしてみると，オドリコソウやラショウモンカズラなどありふれた植物でも意外に面白い分布を示し，信濃川や関川流域に希薄であることがすぐ分る。巻末の分布型の解説も分布図を解説する上で大いに役に立つし，イワナシやチシマザサなど北信地方の分布も示されているのもありがたい。長野県植物誌のお手本ができたといえる。入手希望者は，新潟市姥ヶ山1488-4 コーエイ印刷K.K（振替 新潟5599番）へ。（T. S. 生）